妻たちの女性運動と「宗教的なもの」

――初期新真婦人会を中心に

大澤絢子

はじめに

本稿が取り上げるのは、初期新真婦人会の三人の女性――西川文子（一八八二～一九六〇）・木村駒子（一八八七～一九八〇）・宮崎光子（一八八五～一九一六）――の思想である。平塚らいてふ（一八八六～一九七一）による青鞜社発足の二年後に結成された新真婦人会は、女性の自覚と修養を掲げ、精神面と実践的な見地からの女性解放を訴えた。本稿では、女性運動と夫婦関係、さらには「宗教的なもの」が複雑に組み合わされた三人の女性論の実態とその位置づけを考察する。

1　初期新真婦人会と「宗教的なもの」

一九一三年三月、文子・駒子・光子は新真婦人会を立ち上げ、同年四月に共著『新らしき女の行くべき道』を刊行、翌月に機関紙『新真婦人』を創刊した。新真婦人会では、「婦人の自覚」を促して女性の就業を奨励し、それぞれが「無限の潜在力を、どこまでも発揮しやうと努力しますのが、新らしい真の婦人の生活であります」との宣言が掲げられた。[1]

文子にとって、目指すべき新しい女とは、修養に努め、思想、知識、品性からしても時代の先覚者かつ良妻賢母だった。女性の目覚めにあたり、駒子も家庭や夫の存在を切り離すことはせず、妻が夫に服従するのは、その夫が服従するに値する男性だと妻が判断したからであって、夫に服従するかどうかの決定権はあくまでも妻の側にあると主張し、自由恋愛を通した精神的修養の重要性も説く。[2] 光子は、女性の参政権獲得、政治と教育における男女平等の実現を訴え、男女が同じ時間働いた賃金は同一にすべきといった具体策も提唱しているが、あくまで男女の体力差や向き不向きをふまえるべきだと考えていた。新真婦人会の理念は、青鞜社と全く異なっていたわけではない。しかし、補填的な男女関係に重きを置き、男女の区別や性別役割分業を擁護し、あるいは駒子のように夫への服従すら容認して女性の精神的解放を説く点は、青鞜社と明らかに異なる。

初期新真婦人会の最大の特徴は、文子・駒子・光子がいずれも「宗教的なもの」と密接に関わりながら、精神的な向上による女性解放を目指したことである。ここで言う「宗教的なもの」とは、「宗教」とは区別されるが、「宗教」を源泉としたり、何らかの宗教性や霊性を帯びたものであり、「霊術」や「民間精神療法」、あるいは「宗教的共同体」をさす。[3] 新真婦人会が発足した大正期の日本宗教は、religion の訳語として明治に生まれた各宗教伝統やそれらを包括する「宗教」と、[4]「宗教的なもの」、そして民俗信仰や類似宗教（新宗教、民衆宗教）といった「非宗教」の複合体から形成されていた。[5] 大正期は、それらの領域内、領域間でさまざまな交渉や交流、抑圧が見られ、「宗教」でも「非宗教」でもない「宗教的なもの」が広く人々に支持され、受容されていたことが明らかにされつつある。[6] 新真婦人会は、こうした大正期の独特な宗教事情を土壌にして生まれた宗教的な女性運動だったのだ。

彼女たちは、自分たちの運動が宗教的・精神的なものであることに自覚的であり、いずれも夫たちが説き、実践していた「宗教的なもの」に依拠して女性解放を訴えて連帯していた。たとえば文子は、修養を通した女性の人格や地位の向上に重きを置くが、この姿勢は、あるべき自己形成や道徳を論じて修養を説いていた夫・光二郎と重なっている。駒

子は、自ら神秘家と称して夫の秀雄とともに観自在宗を立ち上げ、霊視や催眠術を行っており、光子は夫の虎之助を預言者と呼び、神の国の実現のためには「神の生活」を現世で営むべきだと説いて神生教壇で伝道生活を送っていた。

抑圧や不平等を克服する手段として女性の内面に目を向け、女性の神秘性を説くのは、らいてふにも見られる。彼女によれば女性は、「熱誠」という「祈祷力である。意志の力である。禅定力である。神道力である。いいかれば精神集注力」に依って立ち、精神集註によってのみ神秘の門に入ることができるという。[7]『新真婦人』創刊号の「宣言」にも、「無限の潜在力をどこまでも発揮しやうと（中略）私たちは自から之れに向て努力する」[8]とあり、明治末から大正初期のほぼ同時期に、同世代の女性たちが起こした女性運動と「宗教的なもの」が関係していたことは注目できる。しかしながら、青鞜社は全体として精神的・宗教的側面から女性解放を訴えて結束していたわけではない。また、らいてふは駒子や光子が説くように女性の神秘的な力や信仰獲得が女性の解放に直結するとまでは考えていなかった。

2　実際の家庭生活を重視した女性論と「宗教的なもの」

駒子は夫を宗祖と呼び、彼こそが真に自覚した自分が見極めた、自分を「征服」しうる男だと捉え、光子は夫を預言者と呼んで崇拝し、極貧生活のなかでも「人間の人間たる生活は、即ち夫婦一体の生活である」と訴え続けた。一方文子は、新真婦人会を立ち上げた当時を振り返り、転向した夫や家事への鬱屈した気持ちが募っていたと述べている。

彼女たちの言動を夫に対する服従や諦めの結果と見なし、抑圧された自分たちが生きる道を女性運動に見いだそうとしたと結論づけるのはたやすいが、彼女たちがそれぞれ異なる「宗教的なもの」を軸に連帯し、夫と共に家庭生活を営みながら女性解放を訴えたことも積極的に評価すべきではないか。彼女たちは夫の思想を取り込み、それを女性運動に結びつけ、自らが表に立って発言していった。駒子や光子にとって、円滑な夫婦関係や夫への服従は女性が真に自覚した結果であり、家庭生活を共にする夫と思想や信仰を同じくしながらその思想を女性解放論に繋げていくことは、夫や

家から独立して女性解放を主張することとは別の困難も付きまとう。また、彼女たちは夫の活動に単に付き従っていたわけではなく、夫たちの活動にとって欠かせない存在であり、夫の思想を自ら取り込み、宣伝していた。

さらに、未婚女性が多かった青鞜社に対して初期新真婦人会の三人は全員恋愛結婚をして既に子どもを持っていた。彼女たちが重視したのは、妻や母として実生活で抱える問題の現実的な解決であり、因習的な性別役割分業は否定しつつ、実際に家庭生活を営むための具体策を訴えていった。らいてふも、後に恋人と同棲して出産育児を経験したことで母性思想を深めていくが、妻であり母でもあった初期新真婦人会の三人は、らいてふ以前に私生活から思想を形成し、現実に目を向けて精神と肉体の自由を表明したのである。

女性の救済を宗教的立場から説く例は近代以前からあり、法然や親鸞の場合、女性は男性の身となることで往生でき（変成男子）、女性は阿弥陀仏の願いによってこそ救われると強調されてきた。[9] そこには五障三従の女性という前提があり、女性の救済は主として、男性である法然や親鸞をはじめとする男性僧侶によって説かれてきた。近代に入り、出口なおや中山みきら新宗教の女性教祖たちが活躍するが、彼女たちは女性ではなく男性的なジェンダーを獲得しながら両性具有的な性格を帯び、その宗教体験や神観念を表現していったことが指摘されている。[10]

これらを考慮した時、初期新真婦人会の三人が妻や母、さらには駒子が説くように恋愛や女性の神秘的な力といった女性性を保持したまま、「宗教的なもの」を拠りどころに女性解放を訴えた点は注目できる。彼女たちは夫と同じ思想や信仰、そして夫との家庭生活を維持していくことに労力を注ぎつつ、夫たちの説く「宗教的なもの」を女性が抱える現実問題に落とし込み、精神と肉体両面での女性の解放を説いたのである。

おわりに

文子・駒子・光子が拠りどころとした宗教的な思想はいずれも、既成教団の教義ではなく、儒教とキリスト教、仏教

と神道、さらには催眠術と神秘主義を合わせたような折衷型の「宗教的なもの」だった。思想や教義に違いがあっても連帯が可能だったのは、既成教団の組織や教義理解の枠を超えた「宗教的なもの」を通じた精神の向上という点で結束できたからではないか。女性の解放にあたり女性の覚醒と神秘的力を説く点は、らいてふも同じだった。禅を通して彼女が体験した精神的高揚感は、禅そのものからすれば「魔境とされ、警戒の対象となる」が、近代精神史という視点からすればそれは、女性の自我確立と身体への権利を主張する契機となった。[11] 初期新真婦人会の女性たちの思想や活動も、既成宗教の枠にとどまらない近代的な精神性の発露と見れば、十分に近代化されていなかった結果だとは言い切れない。

彼女たちの運動を従属のなかの抵抗と見るか、あるいは単なる従属と見るかは別としても、彼女たちは青鞜社の主張に収まらない女性の生き方を拾い上げ、夫婦や男女という現実の対関係のなかでの女性解放の道を見いだしたのである。これは、明治になり僧侶の妻帯が公認されたことに伴って誕生した僧侶の妻にもつながる問題でもある。僧侶の妻が、家庭と信仰生活を両立させつつ、近代社会を生きる女性として、緊張関係を抱えながらいかに生きてきたかを考える際、初期新真婦人会の思想と実践は一つの糸口となるだろう。

※編集委員会注　本稿は要旨である。全文は大谷大学学術情報リポジトリ（https://otani.repo.nii.ac.jp）に掲載。

1　西川文子・木村駒子・宮崎光子『新らしき女の行くべき道』洛陽堂、一九一三年（『叢書　『青鞜』の女たち　第15巻　新らしき女の行くべき道』、不二出版、一九八六年）、一七九頁。

2　同前、一一一頁および一一四～一一五頁。

3　大谷栄一「総論――大正宗教史の射程」島薗進ほか編『近代日本宗教史第3巻　教養と生命――大正期』春秋社、二〇二〇年、六頁。

4　鈴木範久『明治宗教思潮の研究―宗教学事始』東京大学出版会、一九七九年、一三～一七頁。磯前順一『近代日本の宗教言説とその系譜――宗教・国家・神道』岩波書店、二〇〇三年、三一～三八頁。

5　大谷、前掲、七～八頁。

6　大谷、前掲、一七～二二頁。
7　岩田ななつ編・解題『青鞜文学集』不二出版、二〇〇四年、二二頁。
8　『新真婦人』第一号、一九一三年、一頁。
9　笠原一男『女人往生思想の系譜』吉川弘文館、一九七五年、一三六～一七三頁。
10　宮本要太郎「男性教祖と女性教祖」『宗教研究』六四巻三号、一九九〇年。
11　吉永進一「らいてうの「天才」」日本スウェーデンボルグ協会編『スウェーデンボルグを読み解く』春風社、二〇〇七年、一一三頁。

本稿は、ＪＳＰＳ科研費（基盤研究Ｃ、課題番号20K00088）の助成による研究成果の一部である。